

意義やプロジェクト体制の充実化（ワークショップの定期開催，公的統計の利活用）などについて提案・議論がなされた．その他①就業と家族，②若者，③教育・階層，④ケア・家事，⑤女性と役割，⑥子ども，⑦国際比較の自由報告セッションが開催された．

二日目は，⑧男性と家族，⑨結婚・夫婦，⑩制度・政策についての自由報告セッションが開催された．その他，開催校企画テーマセッションとして「地方社会で生きる外国人住民の暮らし・仕事・学校—地域研究から迫る兵庫県豊岡市の事例—」が企画され，シンポジウムでは「若者の地方暮らしから考える新時代の家族」について議論がなされた．

自由報告では2，30分の全体討論の時間が設けられたものが多く，報告内容の理解を深めたり，発展可能性が論じられるなど有意義であった．また社人研からはオーガナイザーや司会での参加者が多く，進行や活発な議論の取りまとめに貢献していた．（岩澤美帆 記）

## 2023年日本数理生物学会年会

2023年9月4日～同年9月6日に奈良女子大学で開催された「2023年度日本数理生物学会年会」に参加した．この会は筆者が所属する日本数理生物学会の年会である．コロナ禍後，初の対面による大会である．久しぶりの対面大会となって参加者も例年より多く盛況であった．筆者は，「多状態年齢構造化人口モデルに現れる Fredholm 方程式」というタイトルで講演を行った．内容は筆者らが考案した状態遷移の経路の和として人口動態のモデルの固有システムを再解釈する方法についてである．数理生物学会において若手会員もまだまだ増えていることから，しばらくはこの分野は安泰と感じている．しかし，研究内容が実験とのコラボが増えたため，特定の現象に関するケーススタディが散見され，進化や個体群動態の本質に関わるようなダイナミックな研究が減ってきていることが危惧される．こうしたケーススタディの増加は検証可能なモデルを生み出す一方，数学的な奥深さを伴わない事が多いからだ．とはいえ，対面形式の学会が復活したことは今後の研究活動を活性化させるに喜ばしいことである．（大泉 嶺 記）

## オックスフォード滞在と英国人口学会への参加

2023年9月7日から11日まで，オックスフォード大学ワダム校（Wadham college）に滞在し，同大学インターネット研究所（Oxford Internet Institute）のエカテリーナ・ヘルトグ（Ekaterina Hertog）准教授との共同研究を行った．同准教授とは，科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）の研究開発事業「AI等テクノロジーと世帯における無償労働の未来：日英比較から（令和2年1月～令和5年12月）」（代表：お茶の水女子大学大学院・永瀬伸子教授）にて共同研究を行っており，共同論文の執筆にかかる作業を行った．オックスフォードへの滞在は，2020年1月以来，約4年ぶりであったが，街の様子は変わっておらず，ヘルトグ氏が手配してくれたワダム校のゲストハウスにて快適かつ生産的に過ごすことができた．

同11日より列車にてヘルトグ氏と共にキール（Keele）に移動し，同日午後よりキール大学（Keele University）にて開催された英国人口学会（British Society for Population Studies）の年次大会に参加した．同学会では，上記共同研究プロジェクトのこれまでの成果を報告するパネルセッション「Revolutionizing home life: Exploring the impacts, opportunities of domestic automation across cultures, generations」が企画されており，筆者は「Intergenerational Transfer of Care Work:

How Technology would Meet with Future Care Demand in Japan and the UK?」と題する共同研究について報告した。人口研究を主とする同学会にあってはやや趣が異なるテーマではあったが、ジェンダーや家事労働に関心のある研究者を中心に20名ほどの参加があり、活発な意見交換が行われた。筆者の他に、日本からは、お茶の水女子大学大学院の永瀬伸子教授、その院生の江天瑤さんが参加し、同じパネルで報告を行った。また、南デンマーク大学の茂木良平氏も参加しており、数年ぶりに旧交を温めた。

英国人口学会は、米国外国人口学会と比べるとかなり小規模であり、アットホームな雰囲気であった。参加者は英国からの研究者が主ではあるが、他のヨーロッパ諸国からの参加者も多く、オープンで気さくな雰囲気であったことも印象的である。また、今次大会では、キャンパスにある宿泊施設（学期中は学生寮となっているものと思われる）に滞在する形であったため、経済的であり会場までの往復も非常に楽であった。また、昼食はもとより、朝食や夕食も会場で提供されたため、参加者との交流に多くの時間を割くことができた。

今回の英国出張にあたり、英国人口学会でのパネルセッションを企画し、オックスフォードでの滞りに便宜を図ってくださったヘルトグ准教授にこの場を借りて感謝申し上げる。（福田節也 記）

## 日本地理学会2023年秋季学術大会

日本地理学会2023年秋季学術大会は、2023年9月16日（金）～19日（火）に関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）で行われた（9/16はミニ・エキスカージョンと公開講演会、9/17と9/18はシンポジウム、口頭発表、ポスター発表ほか、9/19は巡検）。9/17の「人口・行動」セッションでは下記6本の報告が行われ、筆者は前半3本の座長を務めた。

蔣 宏偉\*・佐藤廉也（大阪大）：日本における食事摂取動機の地域差—私たちはなぜ、私たちが食べているものを食べるのか

村越貴光（駒澤大・院）：大学生による東京都市区町村の名称認知と位置認知

井上 孝\*（青山学院大）・井上 希（国立社会保障・人口問題研）：東京西郊の私鉄沿線における将来推計人口の時空間分析

野村侑平（早稲田大・院）：JR 西川口駅周辺におけるエスニック・タウンの COVID-19による空間変容

宋 弘揚（梅光学院大）：労働力送り出し転換期における促進の取り組みと送り出し機関の対応と課題—中国の労働力海外送り出しプログラムを中心に

阿部康久\*（九州大）・李春嬌（日本 IBM）：中国の出稼ぎ労働者にみる近年の出稼ぎ先の変化と将来の定住希望地域—河南省三門峡市盧氏県の農村出身者を事例として

「人口・行動」セッション以外においても、今後いっそうの人口減少が確実な状況のなかで、いかに持続可能な地域社会を構築していくかというテーマに焦点を当てた報告が多くみられた。とりわけ下記は、様々な観点からの過疎地域再生の試みがうかがえる興味深い報告であった。

中澤高志（明治大）：表出する関係性と日常—大分県佐伯市船頭町・大手前地区の変容について

荒井良雄（帝京大）：離島における ICT を利用した生活・産業インフラの改善の試み—山形県飛島の事例